

## 第二章 めざす人間像

### 1 真実に徹した堅実な人

#### 学園訓の由来

新生日本の根幹となる「真実に徹した堅実な女性の育成」を目指し、一九四八年四月十五日広島県可部女子専門学校が発足した。武田ミキは、女子青年が、社会環境の欠陥や忌まわしい社会風潮に惑わされることのないように、また如何なる苦難にも挫けることなく、強く正しく明るく生き抜く力を養わないこと、世界に誇る日本女性の美徳の高揚に努めていくことによって、社会の浄化に尽すことのできる女性に育つことを希ったのである（武田学園創立三十五周年記念誌四十二頁より）。

これは、次のように建学の精神としてまとめられている。

#### 建学の精神



図1 校章

真実に徹した堅実な女性の育成

- (一) 日本女性の美徳の高揚に努める。
- (二) 社会の浄化進展に尽す人材を育成する。
- (三) 地域社会の一翼を担う。

この建学の精神によって打ち樹てられたのが、「教育方針」すなわち学園訓なのである。

一、真理を究め、正義に生き、勤労を愛する人になりましょう。

二、責任感の強い、逞しい実践力のある人になりましょう。

三、謙虚で優雅な人になりましょう。

この本学の教育理念は、校章の意匠・学園歌・寮歌の中にも明確に示されている。校章を取り上げると、外部を女子の清い操を表徴する清浄潔白な雪で表し、中央には謙虚・純情・忍耐を象徴する鈴蘭を配し、之を女子の魂になぞられる鏡で囲んである。武田ミキ学長の願いを込めた思いが伝わってくる。

### 学園訓の意味

イ、真理を究める 人としての正しい道を忠実に歩み続ける人になれ。人の道にそむくことなく、自

然に生きることが人間の正しい生き方である。

ロ、正義に生きる 事に処してはよく考え、正しい判断をし、これを勇敢に実践に移すことが大切な

のである。それがどんなに辛く苦しくとも強い意志のもとにやり通す人でなければならぬ。

ハ、勤労を愛する 骨身を惜しまずよく働き、よく努力する人になってほしい。努力ほど人間にとって大切なものはない。努力には花が咲き、実を結ぶのである。

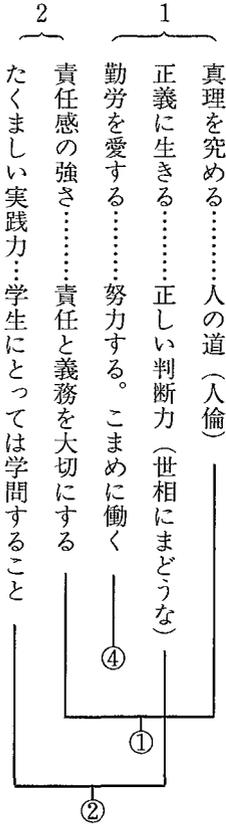
ニ、自分に課せられた任務は完全に果たす 何事も理論だけを主張するのではなく、実践する人になることが求められている。「百の理論より一つの実行」と昔から言われているように、実行こそが大切なのである。

ホ、素直で優しく慎みのある女性になれ。礼儀正しく奥ゆかしい品位のある女性をめざせ。

へ、日本女性の麗わしい美徳を身につけよう。それは、謙虚・優雅・芯の強さの三つに代表される。

### 学園訓の生かし方

倉田侃司は、学園訓を次のようにまとめ解釈を試みている。



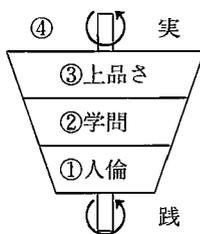


図2 構造図(倉田, 1986)

これを、図2のように一つの独楽こまにたとえて説明してみよう。人の道にそって責任と義務を果たすことを独楽の土台におく(①)。学問を通して身につけた正しい判断力によって、世相に惑わされないうっかりとした考え方ができるように修養を積んでいく(②)。この努力の積み重ねによって、女性としての上品さが輝くようになる(③)。この①→③の本体は実践という④の心棒を取りつけることによって一つの生きた独楽となる。この独楽は、実践によって生き生きと回ることに真価があり、その持ち味が発揮されるのである。

## 2 人間性あふれる人

### 砂上の楼閣ろうかくでは駄目

大学教育の目的は、各々の専門的学術を深く究めることであるが、ややもすると知識偏重になりがちである。本学は、「知・徳・意」の円満な発達を遂げる場として、この専門的学術の研究と相俟あいまって、徳性の涵養、情操の陶冶、意志の鍛練に力を入れている。

追求的・探究的態度は大切なものである。言いかえれば、自主的で責任のある学究態度でなくてはならないということである。学問を志して大学に進んでいるのだから、大学生としての任務、即ち、責任は、学問を究め、徳を積み、人格を高めることであることは理解できると思う。特に心得ておいてほしいことは、「高遠な理想の実現にも、足元の地固めが大切である」ということである。しっかりとした基礎ができてこそ、立派な堅牢な宮殿が建つのであるから、先ず、この足元の地固めを忘れることのないようにしたいものである。一日一日を堅実に踏みしめながら、将来に希望をもち、夢を実現させるように最善を尽くして欲しいというのが学長の願いである。

人間性の陶冶（人づくり）という基礎の確立が第一であり、この上に学問をのせることによって、学問はさらに光を増し、効果があがるのである。逆に、人間はいかに学問を深く高く究めても、人間的に欠けていたら、その学問の光はでてこない。そればかりか、学問をしたことが却って社会に迷惑を及ぼし、自己を不幸に落とし入れることだってありうるのである。

### しっかりとした人間性の土台作り

学園訓に掲げている真理の探究は、本学教育の根本的理念である。また、学長の座右の銘は、「誠は天の道なり、之を行うは人の道なり」である。自然の法則に逆らわないで、正しい道を歩むことは人間として当然のことであり、これは即道徳の実践ということに結びついていく。「真理を究める」・「正

義に生きる」という目標をめざし、いかにそこまで実践のできる学生を育てあげることが問われている。学長は、日常生活を重視し、時と場と相手をみて細かい指導をすることを信条としておられる。これは決して指示・命令ではなく、自発的・自主的に仕向けていくのである。注意された、やかましいから避けるという行動を取らせるのではなく、例えば、授業修了後には窓を閉め、明りを消すといった生活習慣が自然と身につくことを願っているのである。

「愛情のこもった指導は、のびる芽をのばす。但し、これは相手との心のパイプがつながっているからであり、この信頼関係があつてこそ、少々厳しいことも聞き入れられるのだ」と説く。人間を育てていく為には、教育者である教師自らが、学問の追求だけでなく、この学問を支えていく「人間性」にも目を向けてほしいと学長はよく言われる。教育に対する愛情、学生に対する愛情が無条件にしているのであるが、その為には、学生が可愛くないとできるものではない。常に教育に対する熱意と努力がいるし、根気がいる。投げ出さないと何回も判るまでとことん付き合うことによつて、「文教に來てよかつた」と学生に言わしめることができた時、「心を育てる教育」・「人を育てる教育」が成功したと言えるのではあるまいか。

向学の意欲のある学生を受け入れ、人間性の陶冶の上に、専門的な学問を積ませたい。管理するのではなく、見守られながら自主的な運営ができるように指導していききたい。自分で判断していくということで、責任をもたせたいのである。学問に対する謙虚さ、厳しさは、基本的な生活習慣がきちんとでき

ることによって、学生達の血や肉となっていくことであろう。積極さと明朗さは、きちつとしたこのような土台から発しているといえる。

### 人間性を養う

「教育という営みは、人間が人間らしく生きることと同義であり、教育なしには人間は人間らしく生きられないのであり、人間らしく生きることが教育そのものである」と伊藤隆二は述べている。本学の教育は、学問の追究だけでなく、さらに、人間性の陶冶という基礎の確立をも目指すべき目標として位置づけているが、まさに当をえているといえるであろう。さて、「人間性を養う」、「人間が人間らしく生きる」とは具体的にはどういうことなのであろうか。

試みとして、第二節からは「こころの教育」について学問的な取りくみを続けている伊藤隆二の考え方を盛り込んでみることにした。学長のことばを縦糸、伊藤の考え方を横糸として、「めざす人間像」という一つの織物を織り上げてみたいと思う。

### 3 初志貫徹の人

#### 初志貫徹とは

本学に入學する折に迷いに迷つた人もいたかもしれない。しかし、自分なりに決心して入學式に出席したということは、実はとても大切な人生の一つの試練をくぐり抜けたことになつていたのである。六年ないし四年あるいは二年間、学生として本学で自分の心を磨く決心をしたことが初志ならば、それを修了や卒業までやりぬき通すことが貫徹である。自分の選んだ自分の為の學問に取りくみ、また、その學問を支える人づくりの教育に自己の身を委ねることによつて、これから先六十年近い長い人生を過ごすための生き方を学びとつていくのである。第三章にも書いてあるが、「そんなあなたの学びをどこまでも引き受ける」という意味が込められているのである。

「教育は学生の鏡」ということを學長は言われるが、労を惜しまない学生の育成、それは學問を究める素地を作ることであると同時に、自分なりの理想をしっかりと打ち樹てることであるといつてよからう。本学において、自分の歩むべき道を探し出すため、言いかえれば、身を立てるための修養を積むことに努力するところから、己れの道は自ずと拓かれていくのである。これは、自己の決断で一つの試練をくぐり抜けた者が手にすることのできる出会いの機会なのである。自己を知ることによつてこそ、自

分を生かす将来への夢や希望が培われていくのである。

世の中いつも順境ばかりとはいえない。逆境の嵐が吹くときも多くあることだろう。しかし、その時、苦しいから逃げるのではなく、苦しいこと、逃げ出したいこと、泣きたいことのある時に、ぐっと踏み留まれるだけの強さを、また、明るく受け流すだけの力のもとを身につける基礎作りの時期として大学生活を捉えてほしい。学長は、学園創立当所から九年余、ギブスベットの人となられたが、ベットの中心から学校経営や教育経営に尽力されたのである。あれこれと理想を描き、希望を持ち続けられながら初志を貫徹し、今日の武田学園にまで発展させられたのである。

### 忍苦の精神とは

二十一世紀を間近にひかえた一九九二年は、武田学園が発足した四十四年前とは違つた意味で社会環境の急変にさらされ、抛り所となる倫理や価値観はますます多様化し、心の支えをどこに求めるかで多くの人々が迷っているといった状況にある。このような環境のなかにあつても、われわれは表層的な世相に惑わされることなく、自分の道あるいはわれわれの道のあるべき姿を探し求めていく必要がある。

「如何なる苦難にも挫けることなく、強く、正しく、そして明るく生き抜く女性であれ」という武田ミキの言葉がある。人間は理想を持ち、その実現へ向けて一步一步地道な努力をなしているとき、生きがいを感じる。苦難にぶつかったときに正しい判断をするということは、なかなか出来にくいことでは

あるが、自分なりの決めた道があるとき、それが真理Ⅱ人倫に基づくものであれば、先送りすることなく、その時その場で迷わずに片付けていける人になりたいものである。

「誠に徹した優しくして強い女性になりなさい。そして、どんなに苦しい試練に遭ってもまけてはいけません。齒をくいしばって耐える心、忍苦の精神をもちなさい。」武田ミキ九十年の人生において、彼女がまさに歩んできた地道な努力の結果が、このことを見事に証明している。実に多くの人々の協力があつて今日を築き上げられたのであるが、それは学長の人徳のなせる業でもあつたといえよう。

本学園の第一期生で一九四九年に可部女子専門学校を卒業した、大利（有馬）富士江氏の座右の銘となつたことばを紹介しよう。「嵐吹く、世にも動くな、人心、岩をに根ざす、松の如くに。」四十三年たつた今も不動のことばとしてわれわれの心を打つてはいないか。

### 見守られながら拓く道

わが国における第一級の心理療法家である河合隼雄は、カウンセリング場面において、クライエント（悩みをもった人）がじつと苦しみに耐えているうちに、いつの間にか問題が解決していったという多くの体験を得ている。ここで大切なことは、クライエントが一人でそれをやりとげたというのではなく、河合というカウンセラー（相談を受けた人）が彼のそばに付いていることによつて、解決の道が拓けたということなのである。苦しさに浸っている人は前も後も見えなくなっている。カウンセラーという包

容力をもった人の手の内で、じつと苦しさに耐えることによって一八〇度の転換が起ったのである。

青年期という人生の一つの大きな山場において、学生一人ひとりが自己をどのように確立させていくかは、重要な課題である。人間性の陶冶を学問の基礎に据えた本学の教育方針と、教師達の包容の中で、自己確立を熟成させていってほしいものである。伊藤のことは借るならば、本当の幸せは、成績にもランクの高い学校を卒業することにも関係はない。それは、もっともつと味わい深い生き方、心の充実感に関係しているということなのである。人を愛するための知恵を磨くためにわれわれは学ぶのである、それが「こころの教育」の中核をなすのである。どんな人間にも長所がある。それを教師も親も肯定し、本人が自分の長所を伸ばしていくのを共に喜びあうとき、子どもの「学ぶ意欲」は強まっていく。教師と学生との間に信頼関係があり、教師自身が夢や希望をもって生きいくことが、子どもの「学ぶ意欲」の向上の前提条件となるのである。

学生が自由に発想し、(学ぶ<sub>11</sub>生きる)という体験を積み重ねながら、やがて自分に相応した生き方を創造していくのである。その為の学舎として広島文教女子大学があるということ、学生も教師ももう一度しっかりと確認しあうことは大切である。伊藤が学問的に裏付けようとしてきた「こころの教育」の有り様は、教育者武田ミキの生き方と深く関わりあい、重なりあっている。

#### 4 努力精進の人

「為せば成る」を实践せよ

「為せば成る、為さねば成らぬ何事も、成らぬは人の為さぬなりけり。」脊椎カリエスという大病を克服し、教育に対する遠大な目標に向けて日夜精進努力され、ついには大学院を擁する大学にまで成長發展させた武田ミキという偉大な存在者の口からこのことばが発せられる時、それは人一倍重い、そして聞く者にとって心打たれるものとなって染み込んでいく。九十年という長い人生体験だけでも重い存在であるのに、その人の信念として裏打ちされた「為せば成る」は、値千金の重みがある。しかし、このことばの持つ重みを重みとして受け入れるだけの度量（人格の）を学生や教師が持ち合わせていかなければ、猫に小判といったものに化してしまふ恐れがある。

学問を修める大学において、人づくりの教育をもめざそうとしている本学の教育理念の源は、この「為せば成る」の中に存在しているといってもよいのではあるまいか。これからも真の自分を生きていきたいと願い、努力をしているわれわれにとって、実践からにじみ出た学長のことばである「為せば成る」を、自分のものとして分かちあえる人間になりたい。そして次の世代の若者達に、心をこめて話せるそんな存在者になりたいものである。武田学園の心の伝統として、いつまでも生きたことばとして共

有できればこんな幸せなことはあるまい。

### 自主的で責任のある学究態度

「教育は普遍である。秀才だけを集めて教育するのが教育ではない。高等学校教育を受けたい意欲のあるものに対し、高校の課程が終え切れるだけの能力があれば、秀才でなくともその意欲を満たしてやることこそ真の教育である。頭が良くとも、人間的に欠けていたのでは社会の為にならない。数学や国語で満点がとれなくても、人間的に百点の人こそ社会に貢献することができる。」(武田学園創立三十五周年記念誌八十一頁より)

この考え方は、そっくり大学における教育にも当てはまるものである。本学教育の中心理念が専門的学術の探究とともに、その土台となる人間性の陶冶にあることはすでに述べてきた通りである。

近年、学生にこうした本学の教育理念が十分理解されおらず、自覚もできていない者が多いように感じられてならないと学長はよくこぼされる。『喜びと希望』を持たせ、やる気にさせること。与えられたものを受けとるだけでなく、自ら求め、自ら学びとり、自らから磨き、自らが立派に成長するという心構えが、何よりも大学教育に求められているのである。自主的で責任のある学究態度でなくてはならない。教師も学生も教育の意義を十分理解し、共に自覚して希望と喜びをもって臨む姿勢があるので

ある。「教育の充実発展は、国家社会の繁栄の基盤である。従って教育の使命は実に重大である」と唱える学長のごときは、教えられる学生に対してよりも、まずは教える側の教師に向けられているようである。

六年ないしは四年あるいは二年間の学生生活は、学生達にとって人生の中のたった一回の貴重な体験時期である。これに対し、毎年学生を迎える教師達にとっては、何回も繰り返し返されるので、大学生活の中で学生達がどのように日々を過ごしていけばよいかの見通しを立てることが出来る。一人ひとりの学生に対し、人生の道しるべを与え続けるといふ気持ちで、教育努力を行っていきたい。この努力をしている教師に出会える学生は、必ずや自分も努力する人間になっていくと信じつつ、毎日の授業実践に励みたいものである。「知・徳・意」の円満な発達を遂げる場として、大学を位置づけるのならば、受け入れる側の教師の進歩・向上は常に問われる課題である。日常の大学生活において学生達がみせる諸反応は、教師にとっての「教育の鏡」とすべきものともいえる。

伊藤のごときはを二つ取り上げてみよう。

「子どもや若者が主体として学ぶ。つまり、studying を続けていく過程で、その子どもや若者の自己が形成されていく。その実現する自己とは、その子どもや若者の『内なる可能性』であり、本来の生命である。まとめて、生き生きと生きていくその人らしさの全体像と呼んでもよい。」

「教育のほとんどすべてが、『自己教育』ないし『自己学習』である。子どもは自分で学び自分を教

育していく。そのプロセスで天分が磨かれ、そして花が開き実を結んでいく。」  
教師に見守られながらの自己形成であり、自己教育であることはもちろんである。

## 5 外柔内剛の人

### 内に剛く、外に柔かい

日本女性には日本女性としての生き方があるはずだ。その生き方を求める場を作り上げたい。そしていかなる事態に処しても、強く生き抜く女性を育てたい。

- (一) 時流に押し流されてしまわない女性を育てたい。
  - (二) 内に剛く、外に柔かい女性を育てたい。
  - (三) きりつとした知性美に輝く女性を育てたい。
- (一九七〇年七月一日 文教通信第五号より)

この節では(一)と(二)についてまとめてみよう。女性が自信をもって社会で活躍できる力を養うために、本学では各学科ごとに資格がとれる制度を作り上げている。これはただ資格が得られるから取得させるといったことがねらいではなく、その資格を生かせるような実力を身につけ、自分一人でも社会でやっていける自立した女性になる素地を与えようとしているのである。社会の一員として自分の力で十分やっ

ていける自信をもたせるための大学教育であり、その結果としての資格である。資格を得ることが目的なのではなく、社会に巣立った後の長い人生を生き抜いていくための一つの手段となるべきものなのである。

世の中の動き（世相）に押し流されることなく、内にしつかりとした強さをもち、同時に、社会変化に対応できるだけの心の柔軟さをも養っていくこと。この内剛外柔の精神を自他共に認めることのできる実力にまで各人が高めていくためには、息の長い地道な努力が求められている。子育てや教育において、自分なりの考えに基づかないで、マスコミの情報に振り回されたり、人に肩がわりをしてもらおうとする親が増えてきている現在、時流に押し流されず、内に剛く、外に柔かい女性に育つことは、とても意義深いことである。それだけに、しつかりとした方針と覚悟がなければ、なかなか到達しにくい課題であるといえよう。

できうれば、卒業生の全員が、社会浄化の進展に尽すことのできる人材となり、地域文化の一翼を担う存在となつてほしいと願っている。自分の為だけでなく、人の為にも労を惜しまない学生の育成をめざし、これからも有為な先輩の生き方を見習いつつ、さらに多くの後輩が後に続くことを期待している。

### 教育実習生への熱い期待

武田ミキ学長は、教育の実習生に対し、事前の指導をされる。教師を志す者への熱い期待を込めての

話である。この指導は、七十年の教育実践から学びとられたものであるが、伊藤のめざす「共育」の考へと一脈相い通じるものがある。次にあげるのは、実習生としての心得を簡条書にしたものである。

(一) 自分自身にはつきりしたものがなければならぬ。すなわち、教育に対する信念である。これは教師としての大切な自覚なのである。

(二) 教育者としての確固たる信念のもとに、一つの筋金のおったものが必要。教師自身に筋金がおっておれば、相手の児童にも筋金の入った人間ができる。

(三) 情操を忘れた教師が、教壇からどれだけ立派なことを繰り返し叫んでも、相手の心を打つものがないければ効果はない。

(四) 教育に対する深い理解と強い自覚、更に教育者の信条として、愛と努力と人格が必要である。何年・何十年と教育をしてきた者にとっても忘れることがあつてはならない初心の心得ではある。

### 育自に励む若者の背後には

ここで、伊藤隆二の説く考え方に耳を傾けてみよう。いま大人に必要なのは、大人のこころのゆとりである。学校教育もゆとりがあつてこそ実りが多いものになる。身近に「理想」や「希望」をもって生き生きと生きている大人がいるならば、子どもや若者達は感化されるであろう。そして自分も「理想」をめぐし「希望」をもって生きていく道を発見するだろう。そうなれば、やる気は自然に内面からわき

出してくる。

「学ぶ意欲」を燃やしてみずから学び、*「育自」*に励む子どもや若者の背後には、必ず「学ぶ意欲」を燃やし、みずから学び、*「育自」*に励んでいる教師や親がいる。子どもや若者は、自分を主体と認め、かつ全幅の信頼を寄せる大人を尊敬し、その大人にはじめて頭を垂れて教えを乞うのである。

また、この世の中にはさまざまの生き方があり、一人ひとりが善さを出し、欠点を補い、助けられるところに「人間社会」の真髓があることも忘れないでおきたいものだ。

## 6 不言実行の人

きまりを守り、責任を果たす

一日も、授業も、挨拶に始まり挨拶で終る。この一見何でもないような事が案外と難かしいのである。大学生ともなると、この大切さについては十分認識している。だが、いざこれを実行に移す段になると、最初はかなり勇気があることも知っている。繰り返し努力をしていくうちに習性となり、自然と身についたものとして苦もなくできるようになるのだが、そのきっかけがなかなかつかめない。

大学ではもちろんこれまでに述べたように真理の探究が欠かせないが、これと相俟って責任の完遂が求められるのである。これを簡条書きにしてみると、

(一) 責任は自分に課せられた任務であつて、之を果たすことは人間として大切なことであり、当然のことなのである。

(二) 自由と権利の裏には、義務と責任のあることは誰でも知つていながら、その責任や義務を果たしていかない者の多いのが現状である。

(三) 無責任な行為・行動は他人に迷惑をかけ、自己を滅すことになる。

「きまりを守る人になる」・「責任を果たす人になる」ための浸透方法として、学長は礼儀と挨拶を高くかっている。学生の納得のいく形でよいところを見つけ、それを誉めながら悪いところは直していくという指導は、指示・命令ではいけないのであつて、「喜ぶ」・「希望をもたす」・「やる気を出させる」指導がいておっしゃる。言いかえれば、学生への指導は、愛と熱意それに努力と根気の中に包みこんで、任務を責任もつて果たす人に変つていくのを手助けすることなのである。

### 心が形として現れる

学長は、学生達の間に「独自性」や「自主性」が相当養われてきていることを認め、近年、学内においてもお互いによく挨拶ができるようになってきたことに大きな喜びを感じられている。しかし、一方では日常彼女達が知っておかねばならないきまりきった事が案外できないことにも驚いておられる。家庭で社会でしつけられていないから何もできないと言うことは簡単だけれど、そういう捉え方をするの

ではなくて、大学生活の中で、自分なりに心配りができるように時間をかけて身につける努力を学生一人ひとりに求められておられるのである。

日常生活において当然身につけている筈の事として、言葉遣い・エチケット・規則を守ること・環境の整備・授業態度等がよく取り上げられる。

(一) 言葉は心の鏡。言葉は心と心を結びつける力をもつ。その人の内面を正直に表すもので、その人の人柄が実によく現れる。言葉遣いを正しくすることは、自然に心を正しく整えることになる。

(二) 挨拶は心と心のかけ橋といわれているように、人との交わりを始める第一歩なのである。心を込めた挨拶が大切である。

(三) エチケットは、人の中に存在する「誠意と愛情」が他人との交わりの中に態度や動作になって、外形に現れるものである。

(四) 服装は人を現す。形を整えることは、心を整えることですよ。

(五) 授業中の態度は真剣であってほしい。授業は学生の本務である。授業の始めと終りの挨拶は、心の構えであるし、真剣な態度で身も心もそれに打ち込めば、私語などではさすがない。

(六) 細かいことにも気をつけるよう心掛ける人であってほしい。美しい環境の中で美しい心は養われるし、美しい心は周囲の環境を美しくせずにはおられない。

### さりげない努力

日常生活上の留意点としていろいろな事をあげて事細かに説明されるのであるが、学長の言いたいことは次の一言につきる。「気付いたら、さりげなくできる態度を身につけてほしい。」ホゴをとってゴミ箱に入れるようなさりげない努力。良いことをした時は、自分一人で嬉しいと思うことのできる人になってほしいのである。人がいなくても自分がやるという心掛けなのである。人に見てもらいたいからするのではない。だれの為でもない自分が気付いたのなら、己がよかったと思えるような事をするのである。蓮如上人のことばに、「人を喜ばせんと思ふよりは、まず己よろこぶべし。己さえよろこべば、人は自らよろこぶ也」がある。心のこもった日常生活の過ごし方、環境作りへのさりげない努力が素晴らしい学園を創り上げるのである。素直に挨拶をかわしあう学園・真剣な態度で打ち込む授業、何もかも忘れて熱中できるクラブ活動。当りまえの事なのだが、そんな一つひとつがさりげなく実行できる集団は、最高に素晴らしい。

カウンセリングマインドを提唱している国分康孝は、「その瞬間に思いをこめて生きる」といっている。何とよい言葉ではないか。

### 同行教育のすすめ

伊藤隆二の世界を、六節との関連の中でまとめてみた。「感受性や共感性を育てるための合理的な方

法はない。それは意図的に教えられるものではなく、感受性や共感性の豊かな大人と共に生活しているうちに、幼ない子どもにおのずと芽生え、育っていくものだろう。」彼は、教育の真髄として、老子の「無為にして化す」をあげ、徳育の中心に置いている。幼ない子どもの時代に芽生えた感受性や共感性が、その後学生の心の中で育ってきていると信じよう。

「教わり合い、育ち合う」という教育観をもつ伊藤は、「同行教育」を提唱している。それは対面をやめ、教師も子どもや若者たちと同じ方向をむいて並び、肩を抱き合って共に行ずる（修行する）姿勢を重視する教育なのである。（同じ方向とは、地球の誕生、厳密に言うと生命が誕生した20億年前から絶えることなく受け継がれてきたその命の流れっていく方向を指している。）大人の子どもや若者への「信頼」は、子どもや若者からその大人への「尊敬」となって返ってくる。子どもや若者は、尊敬する大人を見習うのであって、決してその逆ではない。彼はもっと一般的に、「子どもの師表となる親や教師が愛を軸に、誠実に世の中のため人のためにさりげなく、尽していることが、最高の道徳教育なのであって、面とむかつて説教するなど一切不要である」という。

なぜ日常の生活実践が人間教育に結びつくのか。学長のことばや、伊藤の考え方によってあなたの心の中にひらめいたものがあるか。「あった！」なら即実践といきたいものである。

## 7 謙虚で優雅な人

### 内面の美とは

美しくありたいという願い（心情）は、人間として当然のことである。しかし、この美と言う中には二通りの考え方があるのである。それは、外面の美と内面の美である。一般に言うあの人は美しい人だというのは、概ね体格・容貌・服装といった外面の美を指している。学長は、化粧や美容は身だしなみ程度であれといわれる。服装は、被服の本来の目的である寒暑雨露を凌ぎ、容姿を整えることにあることをよく理解し、この目的に添って容姿を整え、品位を保つ程度でよいとされるのである。化粧にせよ、服装にしても、ケバケバしく極端であることは却って美をそこない、その人の品位を下げることになる。この外面の美はどちらかといえば、一時的な美で永遠のものとはいいがたく、従って、真からの美ではない。

心ある人の望む美とは、内面の美の方である。この内面の美とは、「心の美」であるし、「美しい心の働き」でもある。図3に掲げたように、教養等によって美しい心が生まれ、培われる。教養を高め、修養を積み重ねていくうちに、正しい美しい性格が育つ。さらに正しい美しい性格と高い教養と修養の積み重ねによって、その奥底からしみ出る洗練された清楚な奥ゆかしい姿が現れる。これが人間としての

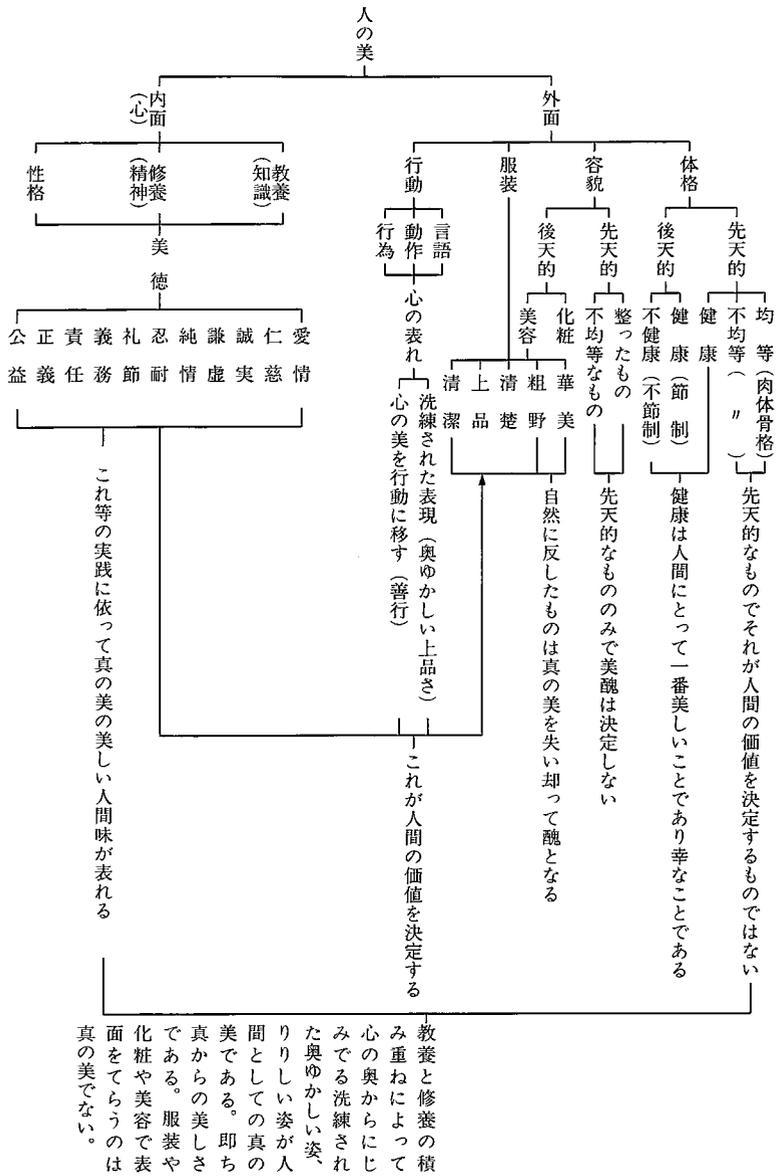


図3 人の美 (武田ミキ)

真の美であるといえよう。この奥ゆかしい内面の美を愛し求めながら、身につけていく心掛けが、真実に徹した女性の生き方に結びついていくのである。外観の美に心を奪われ、時間や金をかけた化粧や身の飾りよりも、修養からにじみ出た美・若さからの自然の美の方がはるかに美しい。これを「健康美」と呼んでもよい。

### 美しくあるための制服

「美しくあれ」ということの中に、服装についての学長の一言がある。学生が学生らしくあつてほしいという願いを制服にも込めておられるのである。学生が色とりどりの華やかな服装をしても決して美しくは見えない。清楚で威厳のある制服着用姿の方がはるかに美しくかつ上品だと主張される。「形を整えることは心を整えることになる」という一つの洗練された美意識の表現として、制服を捉えておられる。

一九九一年度に採用された本学の新しい制服は、なかなか好評である。近隣の女子大学のそれと比べてみても、とてもスマートな上、センスがよい。それだけに、本学学生としての一人ひとりの心の有り様が、世人の目をひくことになる。学長のいう心の美が、それを着こなしている学生の内面から泌み出てくる時、その学生の個性はさらに一段と輝きを増すであろう。広島文教女子大学の学生としての誇りと自信とが、上品な奥ゆかしさを醸し出す。派手な服装は、確かに人の目を瞬時には引きつけるだろう。

が、長続きさせることはできない。その点、制服は一見没個人的に受け取られやすいが、どうしてどうしてなかなか個性的で見飽きることがない。

どんな場所においても本学の学生と分かる制服は、それだけに常日頃より、自分のこと、自分の身のまわりのことに気を使わねばなるまい。この日々の心配りが、一人ひとりの学生に品位のある美しさを約束することになる。本学園教育の根本理念である「心の教育」の実践によってこそ、万人の望む美しくありたい願望は適えられると学長は信じている。「本学園教育の心髄に徹することが肝心なのです」と今日も学長はさりげなく、われわれ一人ひとりに注意を促しているのである。

さあ、きりつとした知性美に輝く女性に育っていきましょう。

品位のある生き方へ伊藤隆二の世界より

「善く生きる」とは、「人間として意味深く生きる」ことだと思っている。自分の役割を自覚し、人間としての深みのある生き方とは、言いかえれば、品位のある生き方である。

子どもは学ぶ。学ぶ基本はまねぶである。そのためにはよき手本が必要である。品位 (dignity) のある生き方をしている大人を子どもは尊敬する。世界に誇る先人が日本にも何人もいたし、大人がそうした先人を学ぶことは非常に大切だと思っている。

わが武田学園に席をおくものは、武田ミキという偉大な存在者と共に毎日の生活を過ごしている。この貴重な出会いの一日一日を、われわれ一人ひとりが大切にしていきたいものである。

## 8 女性の美徳をめざす

女らしさとは

女性たるものの心得として、家政に関する諸事を全て無視しないでほしいと思う。現在は、男女平等で、男も女も一緒に家政のことをやればよいとされているが、平等というのは、男女が同じことをするのが平等というのではないと思っている。男子には男子の特性があり、女子には女子の特性がある。その特性を生かして各々がその立場に立って働けば、それが平等である。女性が女性として本当に人間らしく生きるためには、女性の特性を十二分に発揮できるような教育がやはり必要である。（武田学園

創立三十五周年記念誌一二七頁より）

学長は、女子には女子の男子には男子の性能があると説く。円にたとえて、女が半円とすれば、男も半円で、この二つの半円が一つに合わさって「一円」と化す。つまり、女半円＋男半円＝「一円」化なのである。十分な女性としての性能を発揮するということは、男と女の「一円」を成すことにあると考えて

おられるのである。世界に誇る美しい日本女性の姿として、武田ミキは、慈愛・礼節・勤勉・努力をあげている。日本女性の麗しい伝統を失わないで、益々高揚させていく女性を育成したい。この思いは、一九五三年四月に作法を正科とし、礼法室の施設設備を充実させるという形で実現された。この家庭的雰囲気の中での徹底した個人指導によって、謙虚にして優雅、しかも芯の強さを失わぬ女性を育てることを望まれたためである。この精神は、現代の学園全体における教育理念の中にも生き続け、めざす人間像のあるべき姿としての中心に位置づけられているのである。

キャリアアウーマンを目指す現代社会の中にあっても、女性としての適材適所の最たるものは、母親となることであろう。大事な日本を背おっていく子ども達の生活が乱れていくことの中心原因は、母親となる女性の問題であると学長は捉えておられる。女性の性能の進展、つまり、女らしさとは、細かい心配りのできることであり、これが人間の社会生活の中の潤滑油的役割を果たすことになるのである。日常生活の細かいことにまで心を配ることは、人間性を豊かにするもの・ことになると思われる。

### 細かい心配りの中で

「言語動作・礼儀を十分わきまえ、不作法に流れぬよう、先生に対しては勿論のこと、児童に対しても丁寧な挨拶を交わすこと。また、常に何事にも心と目を配り、骨惜しみをしないで心よく立ち振る舞うこと。」

これは、教育実習生に与えた学長の心得であるが、女性としての生き方の方向性を示しているとはいえないか。日常生活の細かいことにまで心を配れることの気配りの中に、女性らしさがあり、それが人間社会に潤いをもたらす。これこそ、学長のいう女性の大切な性能なのだと思う。広島文教女子大学で学ぶ学生に対して、いつも理想像を思い描いておられるという。学生一人ひとりが、このような心配りのできる心豊かな女性に育っていくことを、今日もひたすら願っておられることだろう。

学生の使命は、学間に励み、精神的修養を積み、将来有用な人となり、社会に貢献することである。このことが、一方では、大恩を受けている両親への「報恩」になることをしっかりと心に留めておきたいものである。親の恩愛に報える人に育つこと。汗と油の結晶であった学資をいただいたことへの親への感謝。親の心へ答えようと毎日を努力しながら暮すことが、すなわち報恩となっていくのである。

「質素だが堅実な生き方」何げない日々の細かい心遣い（心配り）の実践が、心を育て人を育てることに結びついていく。それは人に見せるためではない。目には見えないもののお蔭にも感謝しながら、明日への希望や夢に向けて歩み続ける人間として育っていくことなのである。

### 報恩の二こころと澄んだ二こころへ伊藤隆二の世界より

同行教育を進めている伊藤は、「共育」ということばを創り出した。共育とは、育自に励む子どもと育自に励んでいる教師や親が共に生きる教育のことである。われわれは無数の目にみえないもののお陰

を受けて生きている。いや生かしてもらっているという真理を会得した人は例外なく謙虚である。また質素である。

自分の運命は自分で拓いていくと言うとき、その人は深く豊かに自己についての認識をもっている。その認識は究極的には、自分は天と地のあいだにある森羅万象によって生かされているのだという真理にゆきあたる。このような人は自然への畏敬の念もまた深いのである。

こころの教育、つまり、愛の教育とは、子どもにかかわりあう親や教師やその他の人との愛にみちた行為・真実の生き方そのものを指す。その真実の生き方の根底には、自分を生かしてくれる偉大なるものへの感謝のこころがある。こころの教育は、理屈を教えるのではなく、それはあくまでも体験すること、それも自発的にこころを込めて尽すところに価値がある。その体験ないしは行為の底にあるのは、自分を生かしてくれる偉大なるものへの感謝の念、偉大なるものへの報恩のこころである。『やらせていただく』という気持ちを伊藤は大切にしているのである。この人間らしさが豊かに育つことを支え、励まし、そして共に生きることをめざすのが、教師の役割ではないかともわれわれに問いかけている。

正しい教育によって低い次元の欲望から解放され、目が見え、こころが澄みきったとき、その人は「真実の世界」の住民となる。地球人の母であるマザー・テレサは、「澄んだこころになると神が見えてくる」という。私たちも情緒を安定させ、こころを澄ませよう。不安からではなく、安らぎの中から私たちの意欲をかきたてようではないか。

(秋山幹男)

参考文献

- 一、武田学園創立三十五周年記念誌 一九八三
- 二、文教通信第五号 一九七〇・七・一
- 三、伊藤隆二 ころの時代の教育 慶應通信 一九八九
- 四、河合隼雄 心理療法序説 岩波書店 一九九二
- 五、国分康孝 カウンセリングマインド 誠信書房 一九八一
- 六、東 昇 主体的に生きる 抜萃のつづりその四十一 一九八一